

# 川上ダム通信

2014年1月号 Vol. 100  
Since 2005

創刊100号 記念特集

川上ダム通信は川上ダムホームページでもご覧いただけます。  
<http://www.water.go.jp/kansai/kawakami> 又は「川上ダム通信」で検索  
ご意見・ご感想はこちらへ <mailto:somu1@lily.ocn.ne.jp>

## 新たな出発 — 200号、300号を目指して



新年明けましておめでとうございます。読者の皆様にはいつも川上ダム事業に対しご理解とご協力を賜りましてありがとうございます。

昨年12月、伊賀市から国及び水資源機構に対して、従来どおりの開発量で川上ダム建設事業への利水参画継続の方針を決定したことが公式に伝えられました。昨年2月に市が設置した「川上ダムに関する検証・検討委員会」からの上申を受けて、市当局における水道事業の見直し検討が実施され、市議会における議論も踏まえた結果、このようになったとのこと。国及び水資源機構ではこのことを重く受け止め、昨年3月の第5回幹事会を最後にストップしたままである、いわゆる「ダム検証」を本年早々にも再び始めることとなります。もちろん

「ダム検証」は予断なく、かつ、皆様からの熱い期待にお応えするべく、これまでも増してスピード感をもって進めてまいります。今暫く時間をいただきたく存じます。

一方、付替県道青山美杉線については、平成22年より開始した貯水池横断橋工事が昨年12月に無事完了致しました。地元の皆様に名付けていただいた「猫また大橋」の完成です。工事中はさまざまな形でご協力をいただきまして、大変ありがとうございました。しかし、橋の下流側道路の設計がやむなく見直しとなったため、青山美杉線全体の完成が遅れ大変ご迷惑をおかけしてしまうことは誠に申し訳なく、深くお詫び申し上げます。年度内には見直し作業が終わる見通しであり、その後速やかに契約手続きを経て現地での新たな工事へと進めてまいりますので、なにとぞご理解くださいますようお願い申し上げます。

ところで、このダム通信が今回の新年号で通算100号となりました。9年前の平成17年5月に創刊号を発刊して以来ほぼ毎月1回、川上ダム事業の調査や工事に関すること、あるいは地元の話題などいろいろな記事を掲載し、読者の皆様に少しでもわかりやすく情報を発信するよう努めてまいりました。これからもその基本姿勢に変わりはありません。さらに皆様のご期待に沿えるよう、職員手作りの川上ダム通信を発刊し続けていきたいと考えています。

読者の皆様が、今年の干支の「午」の如く大いに跳躍し発展を遂げられることを祈りつつ、我々職員一同もまた気持ちを新たにして、この川上ダム通信の200号、300号発刊を目指し、今年も頑張っております。引き続き皆様の暖かいご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【所長 神矢 弘】

# メッセージ紹介（創刊100号を記念して）

## 「悠久は物をなす所以なり」

伊賀の最高峰・尼ヶ岳、青い山が連なる山紫水明の町。その地は、私に元気を与え続けた大好きな町。

川上区の古川委員長、役場の猪上町長、同盟会の西山会長。また、三重県庁、伊賀市役所のみなさんら多くの方々との日々は今でも新鮮そのものです。

感謝しながら進める川上ダムづくりを地域のみなさんに発信し、自らも足腰を強くしていこうとの想いで発刊した「川上ダム通信」が100号を迎えたとの事、嬉しい限りです。

イチロー選手の言葉に、「小さなことを積み重ねることが、とんでもないところへ行くただ一つの道」と言うのがあります。

私たちの仕事も「道」の追求です。安全安心の伊賀の地域作りに貢献する「道」。

豪雨災害のニュースに接するたびに、伊賀の地は大丈夫だったろうかとの思いに駆られます。完成した川上ダムを古川委員長さんたちと一緒に見れる日を待ち望んでいます。



筑後川局 恒吉 徹

(元 川上ダム建設所長)  
(H16.4 ~ H19.3 在籍)

## 「100号に寄せて」

川上ダム通信100号おめでとうございます。私は現在、水資源機構の広報誌を作成する仕事をしていますが、川上ダム通信を担当したときの経験が非常に生きています。

当時の紙面を見返してみると、レイアウトが様々で、毎月試行錯誤しながら紙面を作っていたのを思い出します。それと比べると、現在の紙面は確立されており、これも長年の積み重ねの結果だと思えます。

取材では、ダムで移転された皆様にお話を伺う機会があり、川上ダムを切望する思いを強く感じました。また、編集会議は私にとって毎回修羅場であり、大幅な修正が出ないことを祈りつつ出席していました(笑)。それでも毎月発行できたのは、地元の皆様のご協力と、当時の恒吉所長以下職員の方々をはじめとする皆さんの協力があったからこそでした。

川上ダム通信が今後も末永く続き、地元の皆様により良い情報発信がされることを切に願っています。



本社総務部広報課  
武村 剛泰

(元 川上ダム建設所総務課)  
(H17.4 ~ H19.9 在籍)



# ついに完成！！（貯水池横断橋工事ダイジェスト）

平成22年12月より工事を開始した「川上ダム付替県道青美線貯水池横断橋工事」が、平成25年12月、ついに完成しました。



平成22年8月撮影（工事着手前）



平成24年4月撮影（工事中）



平成24年11月撮影（工事中）



平成25年12月撮影（完成）

本工事は、延長226m、幅員6.5mの橋を架けるものであり、橋梁名は皆様もご存知のとおり「猫また大橋」です。なかなか見る機会のない橋梁工事ということもあり、地元の方を始めたくさんの方に見学に来ていただきました。本工事が完成することが出来たのも、皆様の工事へのご理解とご協力があったのです。本当にありがとうございました。



北野トンネル方面より望む



青山羽根方面より望む

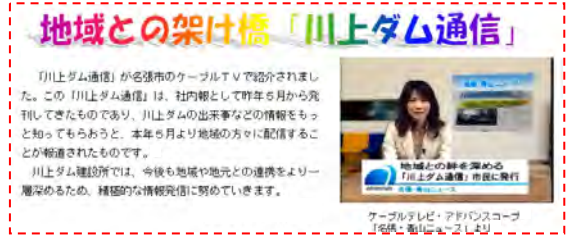


真新しい橋銘板

# ダム通信 100号を振り返る

川上ダム通信は、平成17年5月に創刊して以来、平成26年1月号で節目の100号を迎えることができました。これもひとえに読者の皆様のおかげと深く感謝しております。

創刊当時、近隣の関係機関や社内のみ配布していた本誌は、地域の皆様との絆を深めるために活用しようと、平成18年5月から配布先を拡大し、現在ではダム建設予定地上下流地区の皆様をはじめ、伊賀市内の各市民センターにもお届けしています。この配布先拡大については、当時、ケーブルテレビでも放映されました。



配布先拡大の記事（平成18年6月号）

本誌では、これまで川上ダム事業の計画、工事、環境、そして地域の歴史や文化など700を超える記事を掲載してきました。

工事に関する記事では、付替県道工事や仮排水路トンネル工事等の進捗状況を掲載し、付替県道松阪青山線の全線供用開始など節目の行事をお伝えしてきました。

環境に関する記事では、「ちょっとオオサンショウウオ！」の連載等を行い、その連載中にオオサンショウウオの産卵を確認したという大きなニュースを紹介することができました。

地域の歴史や文化に関する記事では、藤原千方にまつわる物語「創作『阿保千方湖物語』」の連載等を行いました。また、地元の郷土史家、松本仁志先生に「阿保・羽根・川上の歴史探訪」と題して、地域の歴史や文化について連載していただき、職員も地域の歴史や文化に触れることができました。

今後も、これまでと同様、工事の状況や環境の取り組み等はタイムリーで分かりやすい記事を、地域の歴史や文化などは皆様に興味を持っていただけるような楽しい記事を掲載することを心がけて、職員一同努力していきますので、川上ダム通信をよろしくお祈りします。

【総務課 湯本洋】

## 環境用語集 ～お正月編～ #17 門松

今回は、お正月にちなんで「門松」について説明します。

門松は、松を門口に立てる例が多いことから総称してそう呼ばれていますが、関東では、丈の高い太い竹に松をそえたりしますし、関西では、松の枝または小さな若松を用いたりします。昔は、<sup>さかき</sup>榊、<sup>くり</sup>栗、<sup>やなぎ</sup>柳なども用いられていましたが、今でも地方によっては、<sup>とち</sup>栃、<sup>すぎ</sup>杉、<sup>なら</sup>檜、<sup>つばき</sup>椿、<sup>ほお</sup>朴などを飾るところもあります。呼び方も「松飾り」、「飾り松」、「拝み松」、「門ばやし」などその土地によっていろいろあります。松は、昔から常に緑であり、おめでたい木とされており、鎌倉時代以後になって、松に竹を加えて門松と呼ばれるようになったと言われています。



門松は、今では正月の飾りもののように思われていますが、もとはといえ歳神<sup>としがみ</sup>の依代<sup>よりしろ</sup>といわれ、正月に迎えらるる神（歳神）が宿る安息所であり、また、神霊が下界に降りてくるときの目標物と考えられていました。

そのため、門松の設置を31日にするのを「一夜飾り」といってさける習慣があります。正月は神様をお迎えしますので、一日だけでは、神様を迎える誠意が足りないということなのです。また、29日に立てるのは、「九松」などといって「苦待つ」に通ずるということから嫌われています。だいたい12月28日までに立てる家庭が多いようです。

【環境課 飯島芳則】



# “皆の総意と調印を決断した” 古川委員長が振り返る



右 古川喜道さん(川上地区ダム対策委員会委員長)  
左 藤川道夫(川上ダム建設所副所長)

「ダム通信」の100号発刊を迎え、長年、川上地区の移転者代表を務めておられる古川委員長に、事業を振り返っていただきたいと思います。

## ダムの計画発表を聞いて

(藤川) 川上ダムの計画発表を聞いた時の心境はどういったものでしたか。

(古川) 昭和43年、塚本青山町長の時に川上にダムを建設する計画が、突如、新聞報道された。当時の青山町では、誰にも知らされないまま発表されたことに塚本町長が憤慨し、すぐに議会中にも関わらず、

議会室へ川上住民を集め建設省へ謝罪を求めた。地元住民を意識しない説明であり、町長をはじめ皆が怒りを覚えたものだった。住民たちで「ダム絶対反対」のむしろ旗を掲げ町中を練り歩いたこともあった。それから暫くして、川上区内では諍いがあり、村が二つに割れた。割れた二つのグループが区の行事や隣近所付き合いを難しくして、難儀なことが続いた。

## 補償調査に入って

(藤川) 昭和57年から実施計画調査、以後に建設事業へと進みましたが、状況はどうでしたか。

(古川) 水資源開発公団が、昭和57年に阿保へ事務所を構え、公団と協議をするようになった。時には、所長発言への怒りや、担当職員の急な転勤などに、本社へ抗議したこともあった。当初、難しいと予想していた用地調査が、大きな混乱もなく進み、平成5年の建物調査時には、気持ちが(項垂れ)シュンとなる瞬間があった。公団は、仏壇へ線香をあげ手を合わせて調査に取りかかった。誰もがその様子を見て「これでダムになるのだ」と心に刻み覚悟を決めたと思う。

補償基準の折衝時、調印前の詰め段階では、朝、昼、晩と全員に毎回集まってもらい、交渉前の相談、交渉後の報告など、10日程もこのような日が続き、代表として責任が重くのしかかり大変な思いをした。平成8年の調印の前日、「いよいよ判を押すが、かまわないか？」と全員に何度も問い返すが、誰も何も言わない。これまで意見を述べていた人も何も言わず静まりかえり、困ってしまった。皆が覚悟し、(項垂れ)シュンとなった瞬間だった。ここで皆の総意と調印を決断した。

調印席に座り、損失補償基準の協定書に署名する際には、これまでの全ての思いがのし掛かったのだろう、書こうにも手が震えて名前が書けず、一息入れるようなことがあった。

これまで、行政に世話になったことに感謝している。



心境を語る古川委員長

## 現在の心境

(藤川) 最後に、移転し10年経過しましたが、現在の心境をお聞かせ下さい。

(古川) 9月の台風18号で、多くの被害が出た。川上ダムが出来ていたら被害に遭うこともなかったと思う。新聞などで川上ダム建設を望む声が増し強くなっていることを想うと、我々がダムへ協力を決断したことが、この先に見えて来た気がしている。ダムに協力したことが、水の泡にならなかった。苦労してきたことが報われる。

(藤川) 本日は、貴重なお話をお聞かせ頂き、ありがとうございました。

【副所長 藤川道夫】

# 川上ダムの歩み (事業経緯)



旧川上集落  
(下流側より上流側を望む)



一般補償基準調印式  
平成8年12月2日



川上移転地



付替県道松阪青山線供用開始  
平成20年11月17日

- S42 建設省が予備調査を開始
- S56. 4 建設省が実施計画調査を開始
- S57. 8. 3 淀川水系における水資源開発基本計画（全部変更）に川上ダムが追加
- S57. 8. 10 水資源開発公団川上ダム調査所発足（事業承継）
- S60. 3. 30 土地立入協定締結
- H 2. 3. 22 用地調査開始
- H 4. 8. 4 淀川水系における水資源開発基本計画（全部変更）
- H 4. 9. 16 建設大臣から事業実施方針の指示
- H 4. 10. 1 水資源開発公団川上ダム建設所発足
- H 5. 1. 22 水源地域対策特別措置法に基づくダムに指定
- H 5. 1. 26 建設大臣から事業実施計画の認可
- H 7. 3 集団移転地造成工事に着手
- H 8. 7. 7 一般補償基準の提示
- H 8. 12. 2 一般補償基準の調印
- H 9. 2. 27 水源地域対策特別措置法に基づく水源地域指定
- H 9. 3 付替県道関連工事着手
- H 9. 6. 16 淀川水源地域対策基金の対象ダムに決定
- H11. 10. 26 建設大臣から事業実施計画（第1回変更）の認可
- H12. 3. 31 青山町と公共補償協定締結
- H15. 10. 1 独立行政法人水資源機構へ組織移行
- H15. 12. 18 水没家屋移転（全40戸）完了
- H16. 6. 27 川上区（川上移転地）開村式（H16. 3. 13 離村式開催）
- H17. 4. 9 川上ダム建設促進決起集会
- H19. 8. 16 淀川水系河川整備基本方針策定
- H20. 11. 17 付替県道松阪青山線全線供用開始（L=4, 962m）
- H21. 3. 31 淀川水系河川整備計画策定
- H21. 4. 17 淀川水系における水資源開発基本計画（全部変更）
- H21. 7. 24 仮排水路トンネル着手
- H21. 12. 25 国土交通大臣が検証の対象とするダム事業を公表  
川上ダムは「検証の対象となるダム事業」に区分され、検証の間は新たな段階（本体工事）には入らないこととなる
- H23. 1. 17 川上ダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場設置  
(H23. 1. 19 第1回幹事会, H24. 3. 23 第2回幹事会, H24. 10. 1 第3回幹事会, H24. 12. 13 第4回幹事会, H25. 3. 1 第5回幹事会)
- H23. 2. 28 国土交通大臣から事業実施計画（第2回変更）の認可



# 貯水池横断橋名の“猫また”の由来

付替県道青山美杉線の貯水池横断橋 = 「猫また大橋」が完成しました。

「猫また」とは、伊賀市川上字上川原（旧青山町川上字上川原）の俗称地名です。

この「猫また」の由来は諸説ありますが、一説として、昭和54年6月に青山町高尾公民館、青山町高尾郷土史編集委員会から発刊された「青山町 高尾郷土史」の六（民族、民話編）の二（民話）の第六話に「猫又弁当由来」としても紹介されています。



上納米の運び込み

（「青山町 高尾郷土史」）より

その由来とは、

“昔、お百姓が代官屋敷の近くの倉屋敷に上納米を運び込む日の話。上納が終わり、皆代官屋敷の庭で昼の弁当をとる。白いおにぎりとおたか味噌汁、それに日頃食べたことのない魚も付いており、お百姓たちは喜んで食べていた。

その時、代官の屋敷から三匹の猫が出て来た。お百姓たちは猫が弁当の残りものをあさりに来たのだらうと思い、魚の頭を猫にやった。猫は喜んで食べるだらうと思い見ていると、猫はその魚をチラッと見ただけで食べようともせず、その魚をまたいで座敷に上がった。

座敷では代官を始め庄屋や組頭が食事をしていた。そこにお百姓が食べるような貧しい弁当でなく、おいしいご馳走が並んでいる。

三匹の猫は、そのお膳にのっている大きな魚を食べ始めた。お百姓たちはびっくりした。

自分たちがふだん食べているものはもっと貧しいのに、代官の猫は見向きもしない。猫も食べない粗食に甘んじていた。それでも百姓たちは何一つ文句をいうことが出来ない。上納を終わったお百姓の中から、誰となしに「猫またぎ弁当」だったと言い始めた。

町へ出る村の一本道の見晴らしの良い所で、お百姓はよく弁当を食べる。「どれ、ネコマタ弁当を食べるか。」自らをあざけりながらも、この峠で、貧しくてもおいしい弁当を広げる習わしになった。それからずっと「ネコマタ弁当」の名が残った。”

というものです。



にゃんだよ！

この紹介の最後に、『貧しい昔のお百姓のお話しです。阿保へ下る街道に「ネコマタ」というところがある。そこで多くの人が弁当をよく食べて一休みしたものである。交通が開けてから、ここで弁当を広げる人はもういない。』と括られています。

近い将来、付替県道青山美杉線が供用開始され、「猫また大橋」を渡る際に、この「猫また」という地名の由来を思い出していただければ幸いです。

# photoギャラリー (四季折々の風景)

職員がこれまでに撮影した四季折々の風景写真をいくつか掲載します。



西の沢橋付近 (春)



オニユリ (夏)



ダイヤモンドソウと川のせせらぎ (秋)



冬の滝谷沢

- ・皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。
- ・ハガキやメール等でどしどしお寄せ下さい。

※過去の連載記事等をご覧になりたい方もこちらまで。

宛先  
〒518-0294 三重県伊賀市阿保 251 番地  
独立行政法人水資源機構  
川上ダム建設所  
TEL 0595-52-1661 (代)



## 編集後記

阿保の地で産声をあげて約9年。未熟だった本誌は成長を続け、気がつけば100号目にたどり着きました。と言っても単なる通過点、これからは成長を続けることに変わりはありません。

しかし、成長する上では、過去を振り返ることも重要と考え、本記念号では、そのような記事をいくつか掲載しました。

振り返ると言えば、近年のダム通信の主役とも言える“猫また大橋”。ダイジェストでの披露となりました。

また、特に強い印象となった、古川委員長の重厚感溢れるお話。そこに“決断とは何か”が表れていました。

この様に、川上ダム通信は過去を振り返りながらも、前へ前へ歩き続けます。読者の皆様と一緒に。

### 【広報誌発行事務局】

編集長	神矢 (所長)	
デスク	梅村 (総務課長)	田中 (工務課長)
記者	湯本 (総務課)	渡辺 (総務課)
	本山 (第一用地課)	高橋 (第二用地課)
	遠本 (調査設計課)	飯島 (環境課)
	廣瀬 (工事課)	日隈 (工務課)